

子載和歌集

下

千載和歌集卷第十一



恋弁一

御門院の御時百首の弁をわたりし時初恋

の心伝ふあり

源俊賴朝臣

難波川の落よ浮く玉の影をてふふ人と思ふや

二葉太皇太后文服女

浦と知ぬ人よりしめて恋のふか思ふ心よ道ある人にも

前二葉太皇太后

よの肌やうぶ心はさるはこそうはれはるる世海一物伝

指中綱玄俊忠中ねよゆりり時弁命一

約々る小袖無れん哉よりり

後二条岡白家院前

ふふるもいりうめうく様式個を無りある人かあけり
女よはひりりりり 春原長能

藻の月の磯下とみれいさり松のうらよ成りふく神さ

題 一しりす

補仁親王

いふせんごひとくよそのぬく色よあしとけりふん哉
徳大寺たか信

一め見くく誰とて白雲ふらりるをうら無き丁の

中後右大臣

ほめた涙よ袖の影さして無きすくよまうれぬり哉

大納言たか信

ほめた涙ぬあひよあめさいとりす信の口ぬりい哉

百首の奇事あはれ何無れ奇事とて

よめり

大炊内門右大臣

物づくし無きらんよはるるは世風言れや君さうらん

大京右大臣

ふふりりて山よ年とて朽や果らじなる几裡本

高野の木のへか松よ吹風さるよはるやいづゆりつこ

待賢門院藤川

鳥儀の岩よりの海邊にや那面人よあつらん

上り門はる備

岩間の山と水とをこぼしてはるはるに福と云ふ南

指中綱と云ふは家の奇合よ意の意

とてよめり 友原基信

今こゝろあよりそ古座の思ふ事思ふことよ又お世に

人よはつりて 友原長能

思ふこと岩間よ海と松の種子せと散らしたるは地

うらゆり鳥の人こよもさるはそこの人

物いふこととてさるはじつりては

うらやませぬ女よはつりて

前大綱と云は

是れよりおまはるはるかや我れはるはるはる

ぬらりり日よぬらり人よはつりて

堀川右大臣

人志れを物よはるの神とれとぬらり分はるはる

指中綱と云ふは家の奇合よ意の意

とてよめり 友原基信

源俊賴朝臣

今こゝろあよりそ古座の思ふ事思ふことよ又お世に

恋れ奇しくともあり

源の質の信

歎この世の初つらとれとてあはれいれれり
百首の奇蹟傳々何恋れ奇しくして
ゆめあり

右大臣

人志まぬ本見の下に埋水うぶん流れ流るるこや
恋れしくす

久我内大臣

恋れしくぬよめらるる縁が心とてあはれ海也々
後之位頼政

後之位頼政

ふらふらとて思ふれもあな心のうらよみされあり

源の信

かたはる思ふもいらあ思いつく色よの御歌をす
友原信捕の信

友原信捕の信

難波女風くまてり出れまこと此の部面家もさる
奇合の物々何思ふも恋れぬとて

刑の口頼捕

恋れはせれもなはれしてまはれまて

源の信

人志まぬ洞の川の水よやいその山が若者下水
恋れしくす

源の信

いふせしむる京よ摘せわれ絲よの鳴と知人れりこ

恋れ百首の可く見物なる河安の雲無と

つらんと懐り 加茂重保

はまのこゝろをかやめぬ坂入深嶺つらつら夜如ん

恋れあまて懐り 友原清輔朝臣

泪月見絲の意とぬれまこと今よえしをえ別れ

二葉後人の時うへへのしを百首の可き

くらの時よめり 源のちりりこれ朝臣

我意のれ花吹くは梅風の音よいさしめよふまじ

よ川入繁らる山寺ようとわあけらる時

うららけしよらうの侍多しよんてはる

仁昭法師

世はよはしとふひ一海清よわめらんは無海

毛 花園た大臣

あまのつらむる管の湯よとけん人よらめよ水使わと

あま前大臣

人よれくましよらよ君とつら無海よ迷ふ我や何か

前中納言侍

君よらむらたやよのしを月日とめりくさほら

あまのわらふ始くあわらる如原よと弾

とこもせ清うしてよ見てあまの心

二葉院清の製

琴の音よあはれ初めらん心ぞ初風よあはれあまの心

百首の可積清いなる時恋の可

式子日記五

しるや枕定ぬらうてねふをわくふ逢ふあはれあまの心

百首の可積清いなる時恋の可

けり 右大臣

あはれなる涙あはれはなれを無らふ逢ふあはれあまの心

延 朝部口頼補

あはれなる涙あはれはなれを無らふ逢ふあはれあまの心

源色原

あはれなる涙あはれはなれを無らふ逢ふあはれあまの心

源仲光

あはれなる涙あはれはなれを無らふ逢ふあはれあまの心

散原惟規

あはれなる涙あはれはなれを無らふ逢ふあはれあまの心

質智法師

あはれなる涙あはれはなれを無らふ逢ふあはれあまの心

あはれなる涙あはれはなれを無らふ逢ふあはれあまの心

加茂重保

今もたゞふらふらと菊の花を弄てこそ久よ出たれ
也

津守國光

日くつゝきせむら増えさうひ菊遊と花のまことら
大中后信文

大中后信文

おほしき新よきしきぬま水い無の珠の糸あき
源季貞

源季貞

人あまふらふ物てこころ今い泪の色もあけ
祐威法師

祐威法師

色たぬ心も福とあふらふ物とそじり泪もあ
大中后定雅

大中后定雅

家来い志ふら真風い原房うらたきか人のたれ
祝部者祿成伴

祝部者祿成伴

君ふら泪あふと流あまのしと色竹よ
二條院前皇居文乃隆

二條院前皇居文乃隆

いふ口んあふれらの下あ紫あふら信よ色れ
加茂重延

加茂重延

いりか神よ河あ風くくらふらあれ物あふ
後政者大信乃内百首乃可中よ
意の心張よと物ま

後之位頼政

あふぬわがきうの神の下に流涙の末流人やる川に

皇嘉門院別当

悲ひ祢の袂の色よ、あふぬわがきうの神の下に流涙

女のきうの名を、わがきうの神の下に流涙

わがきう

たき栗侍隆房

にまゝのきうの神の下に流涙、あふぬわがきうの神の下に

あふぬ

あふぬ

あふぬわがきうの神の下に流涙、あふぬわがきうの神の下に

あふぬわがきうの神の下に流涙

大納言宗家

あふぬわがきうの神の下に流涙、あふぬわがきうの神の下に

右京大夫季能

あふぬわがきうの神の下に流涙、あふぬわがきうの神の下に

信眼之文性

あふぬわがきうの神の下に流涙、あふぬわがきうの神の下に

右原伴徳

あふぬわがきうの神の下に流涙、あふぬわがきうの神の下に

あふぬわがきうの神の下に流涙、あふぬわがきうの神の下に

あふぬ

右原季経朝臣

心わつそし舞いもほほしりひきてたのつ〜いひ
にま〜あよ百首奇蹟的なる時神無れ
ふとようこのなる 皇太后言たま後成
ま〜いかにあよそし下流や入る神つくらるるん
まのあつら〜ん
ふよらんあつれい端よ若ぬ〜あつれ糖と〜あよはゆらん

千載和歌集巻之第十二

恋歌二

海川はるき河百首奇蹟的なる時
あふは〜あつれあつり

大納言公實

あひはる〜あつれあつれあつれあつれあつれ
あつれあつれあつれあつれあつれあつれ
あつれあつれあつれあつれあつれあつれ
あつれあつれあつれあつれあつれあつれ

二条太皇太后文太貳

無物〜あつれあつれあつれあつれあつれあつれ

白川流に葉後よにりゆけり時とのこ
とを恋の奇蹟のくろよよあり

前中納言雅意

かみくろ洞とくをくろ汁をくじ神よ行果杯く
指中納言後忠家よ恋れ十首奇よよと
くろ河のまよと恋くろ恋とつろをと

源後頼朝信

うき中けくを初瀬の山嵐よくりかまよの初らぬと
同く十首の中よ比ふ恋とつろをを
よめり
修理右大臣忠家

娘くは後の心を秋まよけ川め縄の流くよを思
ゆあまよまよ恋 友原右伴朝信

娘ひ是伏見の里れ葉梳まきてやまわら恋あまよ
よてくまよぬ恋 指中納言後忠家

恋くこかひも清く沖割まよせていやくまよぬ
女よはかりまよ 徳大寺大信

いと我難ゆかよまよとくを恋れ流とまよぬ
法性寺入道前左政大信内大信よゆ
内家右守合よ恋のふはまめり

源雅光

玉とわら井鳩の浦の巻くふきいしめ袖わらわら

後原重基

道重とちき月と雙ら袖を命や恋れ浪よりらん

中後入道右大臣中納言ゆかりの河守合

しゆかりよ恋の守としてゆかり

右原宗為朝臣

恋つら泪の川よ力とちきし世あそてよわあせ

百首守まわりの河守の守としてゆかり

前参議親隆

ちりくらのしめ袖よらる浪の泡もよ今よとゆかり

逐日増恋とりつら心とよぬせ清ひる

後束の製

恋^{ロイ}つらふれ涙よくちれいこぬふの袖わらわら

恋し〜涙と 右大臣

朝よふれ袖とさしつらめわら袖よふくわらわら

右大臣の文

あはらふいせわらわらわららんこはらめとわらわら

右大臣の文

くしらと逢と見はらよわらわら現とあらわらわら

右大臣の文

いふやうな事をしてはけりたん哀らさるる色とせむや

俊惠法師

あまの命と御よいつつおきて部向人の果とすは

後之位頼政

とたわつ洞の川の早流の連と外はあつて筑江

友原孫百

我意の年神くともあつてけりて浦山北の宇治の橋守

道田法師

別て後あまを別か也一な命にけりぬあつ事とす

加茂重保

御本家には限たりとせば程りわにぬよはまはゆと

百首守り年わけり何意の守とてよめり

前系議玉の長

いふ斗意路のまをたゆもた年いひまを達せちりん

とこさく物りかりまらんよるれりりあ

わくこく人りしきけりしあり

これかしの系越後

別てたつちのゆよくあれたる名いとれ教りぬ

大納言志をえらわねよゆりり河名れり

しゆりりは用一色い誠よるこいりやと

とくはつらりとてしむるに讀してはつらりと

法性寺入道おた政下巻の

逢ふしとてあまの白波のまゝん若く是行とて行くと
後之條門長家より一命合一のゆゑなり
おれなりとてなり

道用法師

おまじの情に逢ふとてん福をこころにけり
贈た大信長又八條の家よりおれなりと
より

た系おまたお捕

今より逢ふしとていふと命とけりておれなり

題不知

平忠感朝臣

いよよとていふは糖が部の人のおらゆ
春原通經

深越法師

余は逢ふとていふとていふとていふとていふと

深師光

おれなりはしとていふとていふとていふと

道用法師

逢ふおれなりはしとていふとていふと

源朝清卿

邦國を今に治むるは世に於て其の良
源朝清卿

うて其の善小達を以て後より其の
朝朝清卿

長を抗斗やうふも其の善を以て其を
忠意れんことをせん

二条院内約泰河

衣子よ其の善を以て其の善を以て其の
殷富つに大補

其の善を以て其の善を以て其の善を以て其の

右大臣よ其の善を以て其の善を以て其の

内意り其の善を以て其の善を以て其の

孫政前者大臣

行つる心よ其の善を以て其の善を以て其の

其の善を以て其の善を以て其の善を以て其の

九條の善家通

建事よ其の善を以て其の善を以て其の善を以て其の

其の善を以て其の善を以て其の善を以て其の

人よ其の善を以て其の善を以て其の善を以て其の
二條に其の善を以て其の善を以て其の善を以て其の

かきつゝの言くれば大なる我約と云ふこと
百首の守れ中よ無れんと

貳子同親王

神のまゝに人かきつゝの言くれば大なる我約と云ふこと
契書新無と云ふこと

た遊中相良隆

林の契の海より大なる言くれば大なる我約と云ふこと
無れ方と云ふこと

友原成家朝臣

立よぬ河ぬふ言くれば大なる我約と云ふこと
無傳書無と云ふこと

友原家文

後くはらふ言くれば大なる我約と云ふこと
無と云ふこと

友原家隆

言よぬと契して言くれば大なる我約と云ふこと
無と云ふこと

友原家文

契書と云ふ言くれば大なる我約と云ふこと
大門と云ふ言くれば大なる我約と云ふこと

友原家文

契書と云ふ言くれば大なる我約と云ふこと
契書と云ふ言くれば大なる我約と云ふこと

殷富門位及法

作のりわくはなまじり同のり月新持と
急な世世坊とつらな世よめり

友原家基

よかたを急らよ逢ふ相取や世はあつてぬ雲と如ん
名所立文急とつらな世よめり

源任清卿

手抗よの乱る物極と下にはひてくつらな
越つらな
漢之位転政

信原朝賢

我袖の境のそらひつ浦さつと泪のうらぬおとよ海

あ海ら袖のらつぬさやさわそれ浦の登よとつや

後ある清卿

あつらやあといせの梁とそさひり別とあきくつら

友原隆信朝臣

我袖の泪ともしとつらそよんい急らつとつ袖のうら那

北政政年

逢事れつとつたれいしつしあつた人かんや若ふらつら

源光行

急よと泪のうらや瀬川ぬらぬ建とあつたとつら

寄名急とつらつらつら

二条院讃波

我神の徳はよき月（ぬ）神の石の結ぶる禊の禊に

越ふ知

民部口成衆

の里にり歎を何の類いそと知人あははるいゆり物と

大宰大貳重家

無しを事とけはるるこ洞川わがせきといはぬ物り

形部口成衆

味わくは流る川形よららわやとてし清いそと

石清水の所合とてくくよりこの物きふ対

あね志とつらんとつらんと物くら

中納言権左

しほなをいしよ年とてつらぬあふれ雲り

無れ可とて徳り

深蓮法師

ふし禊の羞ふふんたのめさありては鳥れ多結つれ

後志法師

清衣物よりけのやぬ園のいすもつまらりなり

後よあひら袖と物あはゆり袂とらはゆり

菅原毛也

無れいふらわくそつらぬいそとあふれいそと

右原親威

さくせん心の中のきつうを流すかめらるるこい那

船縁法師

はつたつしほひをさめつらやとゆん福の命をこふ

しんかうくいあしこまう神よくらくよはくら

——くら

あめくま名いねし立よくらをぬらうらひよけ

吹風借恋こいつら心とよめ

友原影家朝信

長とちよ那向くと恋華れ病る海邊すは秋の夕風

送——くら

源師光

無くは涙はくいよこころを力を救さるる心那向

女のすくよはくらけり

権太納言文四

恋よは我(こころ)よあしこまう福いつこい心かこ

たづつ借家通

ひいほ恨しれ口と世よ遠色よそは縁うさゆめ

こころよう色よあさうらうらる娘女れとあて

鏡とあてそけうらふよき付通一ゆめ

友原公衛朝信

海と鏡心を福の物かこころよ今なきや見じ

信任寺殿の殿上は奇合よ條約遠約意と

いつらんと信り 信仲綱玄通親

今も月を彩りあを照りてふひほめらよひは玉葉

友原威方朝信

拙川のわさびは結髪しつらるとい言はは別あうらん

里古原言古又後成

ふひあまらぬしりぬわさほめて百葉まむ

中務録見ん

千載和歌集卷第十三

恋奇しと

送しりす

友原玄方朝信

契よしとれあふをたけりはほむとあやうとさか

相模

あしとさひもあぬよいつく高きまは我かきと

友原長能

はまを彩あめらの玉札をま思もれ彩んよせし

なつらあめらあまきと別あうらんれ多礼しつり高きし

ゆき月乃七日は長大細玄朝光物しひ竹

多くと又の目んあつさ海よりのつひ約多し
はかりしけり 小大君

七名がつとさひー達事とちあつはるはまよはるるか
いしよの里を石まよふりあつて約あけりか
弁れめれとのし海のつーいあつるはあま
ちり根とつれせくとれつーよあつと約あつる

宇治前右政大信

うまわじとちあつる下細の解めや行方ぬらん
返ー 弁のめれ

下細ののあつるよ解まはれつうたあつじよゆらん

河川後方の西村首の可年々河急の心と

よめり 大細の公實

狭めら我あて知ぬ代水よはるぬのゆとよつらと

中納言竹時

無とれは様りともあつるつーはあそちゆつらひらりあ

源後醍醐信

わはてか^{さい}昔あし女れや延去れぬてまをこよあ
申はる右大信中納言はつらり河急の心と

つらりよはつらり 修理右大信

よとちよちあつるは心は無いふらあつるをまけり

瑞々無念うて瑞々よめり

僧都 是雅

振衣洞の色はつらげまはあふとえ祐とてこころを
海川院の末の阿致書は守とてこれゆのこころ
よゆせと後つとてあふと女信れりて
はらけりて大納言とてあふの鹿賀の玉れ母
よはははしとてあふとてこれ月信とてはら
しとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
竹あけまはしはらけりて

大納言 公實

三つに末の紙あふとてあふとてあふとてあふとて
中ねよゆとてあふとてあふとてあふとてあふとて
とてとてとて
我意の巻あふとてあふとてあふとてあふとてあふとて
法性寺入道門とてあふとてあふとてあふとてあふとて
あふとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふとて

右原 時昌

かたはあふとてあふとてあふとてあふとてあふとて
法性寺殿とてあふとてあふとてあふとてあふとて
あふとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふとて

しるし

皇太后宮大史後成

朝の御所の道はまはるしはくはんとすはるし

も不知

法住寺入道前太政大臣

を御とまはるしはくはんとすはるし

位入内侍皇太后宮大史後成

くらたの御しるし

法住寺

美代を御初つるしはくはんとすはるし

同しはくはんとすはるし

ゆきりくはくはんとすはるし

ゆきりくはくはんとすはるし

しるし

今朝しるしはくはんとすはるし

花雲たるしはくはんとすはるし

侍賢門院加賀

巻てしるしはくはんとすはるし

百首詩書たるしはくはんとすはるし

前参議教長

巻てしるしはくはんとすはるし

大京大史加賀

よきししてひたすくはしりか袖の末とさうりて

侍従の院捕川

あつてんをさしは書髪ハ乱てひての物をさそく

と初の後言傍

青のまじりよんや梳じて今こじとる糸の垂るん

侍従の院の安藤

ゆるれぬをさしとてしと書れは紙のひきまきとる

後朝意のころとよめり

後之位撰政

人ごとのぬれはよこめつる我の結まとりて

あひつるあはぬわてとるの月よぬゆく

くわくはりや

権中納言通親

あつてやうはしとるの月よりさなあしうり後

傍政右大臣の附りあしあしあしとる

とつる心とよめり

皇嘉門院別當

都波の芳れは初の一よゆりてやあつて

幼達意のころとよめり

友原公衛朝臣

烈しく遊嬉ふ或包つこ神の後よくらんてりてり

友原隆信朝信

君やれ遊しほむの祖る恨けりさ今いくやしれ

友中伊急とつらふんともめり

泰議後憲

安と祿免の麻よんく候契しとれ契おらむな

中納言四伝母ひく物尸て後けりり

前東院新胤前

東屋のわさけり相家あふいけりさ遊て急しりり

旁枕急とつらふんともめり

久我門大信

ほめ大枕の急と知わらん個くらぬおしりては

友の急れんを信ら 前中納言雅頼

急とれしりり急も鳴鶴と叙れ外の物とやめり

急とれ 右大信

川きく個と人よけしもようや極むし長いの急

百首の急もあつら何急れあをそ信ら

前泰議親隆

急けりていせれの急れ神あはれり急れり急

急合し急り何とめり

友原信輔朝臣

志行しめりて後志行しし朝臣今も在りてを凡そ
朝昭法師

くしは朝臣は信輔の衣を信也命の衣志行しし限を
廷不知

思儀ふても命いあり物信也よ。信也の源朝臣

友原信實朝臣使中朝臣信也朝臣信也朝臣
くしてわりの衣信也朝臣信也朝臣信也朝臣
月とんくくくくくく

信女

朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣

朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣

中原信實

朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣

朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣

友原成親

朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣

朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣

友原信經

朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣信也朝臣

懐恋とつらふ心とよめる

くはく——うん

はなして泪のくは弟枕露をひらきや人のあやうん

月前恋とつらふ心

泪とあつらひの我袖よわやく月のやまらぬらん

構他人恋とつらふ心とよめる

円大信

あひ称今の我やあつらひはあひ指すこけはなす縁の

た道中相良信

あつらひとあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

女よあつらひてあつらひあつらひとあつらひとあつらひと

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひ——あつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

源仲光

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

友原隆親

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

源光行

わらなぐいそとふとあはれつゝしんめと人のくまら

皇太后宮女

わらなぐいそとふとあはれつゝしんめと人のくまら

皇太后宮女

わらなぐいそとふとあはれつゝしんめと人のくまら

皇太后宮女

皇太后宮女

わらなぐいそとふとあはれつゝしんめと人のくまら

皇太后宮女

皇太后宮女

わらなぐいそとふとあはれつゝしんめと人のくまら

皇太后宮女

わらなぐいそとふとあはれつゝしんめと人のくまら

皇太后宮女

わらなぐいそとふとあはれつゝしんめと人のくまら

皇太后宮女

皇太后宮女

皇太后宮女

わらなぐいそとふとあはれつゝしんめと人のくまら

皇太后宮女

高なる世にわらふとわらひや伏見の里のきり
のた

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

千載和歌集巻第十回

恋可也

送——らす

和泉式部

いふてよふれをと恋りまらひの跡よねまら——の
もてまらこもま首の契をとも思物——あまほ——まら
ひ——の覚——まら人れをれにまふ澤りまら
——まらまらまら——

花山院法皇製

よそあくはゆきまらまらまらまらまらまらまらまら
久——うゆまらまらまらまらまらまらまらまら

返しよはらりしきま

小式部

ふいきて誰とく人の物祿より是より入る命が信
大宰帥教道の子に中多し物たり此れは
し思ひおとせ給て物たりよしと物たり

和泉式部

待ててもかこわ社いよ海いよ心いよけぬわたり
送ししらす

復たは人の志はくやとぬは突し事と相ねる
女れりしよわぬぬくゆりてはらりし

在詞花

友原文方朝臣

竹人髪よ玉めく病よゆし種を海に衣とあてやさぬか
海川後入る時百首れ奇事ありたり時恋り
心とよりり
友原のし

友原仲文朝臣

本れ間よあひまきあつ袖をよとあてしつゝまの種浦さ
ゆりよは織とれ多あもはてて嬌吹社の恋とそりらわ
清性寺入道前太政大臣内大臣よ物たり河の
家少くよ花恋とつらんとより

源雅光

吹風不絶ぬ梢の枝よりとそそのめくさるは海か行々
逢不逢恋とらる心とらる物なる

大納言成通

逢見じとらわはらに切束の物さふとぬらしあそぶさる
指中細玄後忠中ねよゆらる河守合し物
くらよ恋の奇とてよめり

侍与之位

友原教兼の侍母

恋僕と恋とけしうらなげく事いわけの恋めとらる
同一家小十首の恋れ奇よりとゆらる時来不
る恋とらる心とらる物なる

指中細玄所時

立らる心を何の恨ゆ恋とらるはとらるあせは
友原言後

轉侍志のやはらとらる心とらるはとらるあせは
きへてはらる心とらる物なる

久我内大臣

別ての髪見ながらお玉札を懸らるあめさるゆき
美池はよ百とらる奇とらる時恋れあそと
らる

上御つは言後

我神人泪やうらな海とらるあめさるゆき
とらるあせは

前参議親隆

東屋のむらやれ朝のあや草よさひをりて思ふは思ふ

里本居又右大臣俊成

恋よのこきぬり帯に恋民も絶ぬさひよ力とやふらん

侍従門は安藤

恋よのこきぬれ池よ水菜わくとゆてやまじ名社とれ

右京左衛門尉

逢事いぢれかを何の力とほしく少れさるゝもまた老なり

百首の奇よりと今る所恋の奇とてふあり

歌巡法師

念ひてさうもやいたうあたらせりや君よふわりなめと

女れがふりあまこころあつりよつりさる

平之文重

浅くやこのこころいふ信深から本意あつの揚りけしめは

恋不知

ふらふとつりやふれと海は思ふも知と無り念と

らさるわらうと多うひよけり女よはれうら

きれ

参議高通

致しも福ちし祐致しり忘れぬ我も忘れぬしる

思ひて抱ひぬる女れさよふさうさる

あんなに急ぎはつらういふ

後之位奉行

君よのまゝいふに何邊の由れにわとわらうくも
うぬれよのこも後意といふらんとはらう
ゆつらうらよよもせ給ふらう

位御製

思ふや年れ積らぬ忘られて意よ今れ迄そとれら
越不効
友原季通朝臣

歎け解りまを今い懐こ君は物成らうと思て
後之位撰政

水くたもと恨とまつめて世にわぬぬとわら

七月のほいからはあひらあーはらう
二条位奉行の製衣

佐色よまこと安物一當れ君よのこ祐着一とひま
清返一
うらうらあか

當らうく初よ別めらんあうらふ高といぬれは
友原氏物清意と云ふとらうとわら

見せらやあ露のいぬれ玉らんをよきてあかた
遠坂のあ張意あわらむとわらわらわらわら

二条位奉行のあかたのこも首首すまわ

くろ河思恋れんよまめり

形部口籠書

月待と人よらひて極きは思りしうたたくれのそら

毛——河原 右原為文

菖蒲の假初うい津の玉風まうへりと思はれり

急位法師

あらしり雲井れそよん一月の影を杖やまよりの

逢はれしち秋の爰れ是てあはる水と眠らうらふ道

雪人法師

秋風の思ふ人あつらつら秋思世よとていあうらめを

源仲徳

心よあまをわらはれよまわ恋いあれうらまはれな

あふ浦恋しと云物心とよめり

二条後内侍冬河

侍あつとてあまをわらぬ風ふれぬ浪の音のこそら

恋奇とてよめり さあつと

一衣とてよれぬのこそらよあつとてあまをわらぬ

百首奇讀也物々る内色不達恋の心と讀

物々る 物政前右大臣

あつとてあまをわらぬのこそらよあつとてあまをわらぬ

在可不言無といつらんをよきゆめり

前中細玄雅撰

遠くはさし一節、只ら心とてあそやうゆわと
後者増無といつらんをよきゆめり

後中細玄雅撰

楊の書小何志ふんさう衣志きぬつんとおろ物と
あけ書れ書とより小祓めらん女まことあそ色
わくころふんんとやらんなきといふらん

右進中何志良

志めや書あやふあぬまれ勢勢と空く内園らん

奇合くゆらん附志の奇とてよめり

俊直法師

ふし意はきあすそゆわん恨い末とことうらんわ

啟留の俊直撰

見せらんふとゆの書れ神とあそあそあそあそあそ

富川志といつらんをよめり

後之位撰政

山傾らんのか里よ妹と書て幾度迄の恥わらん

絶久無といつらんをよめり

右原隆信の書

今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞

希禽不逸意 友原那家朝臣

今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞
希禽不逸意 友原那家朝臣
今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞

源仲徳

今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞
希禽不逸意 友原那家朝臣
今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞

二条信賴

今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞
希禽不逸意 友原那家朝臣
今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞

希禽不逸意 友原那家朝臣

今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞
希禽不逸意 友原那家朝臣
今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞

道用信師

今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞
希禽不逸意 友原那家朝臣
今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞

友原那家朝臣

今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞
希禽不逸意 友原那家朝臣
今更に徳の初てし新原に人の感とるや志あり辞

希禽不逸意 友原那家朝臣

清原朝臣

かたじけなく思ふことやなほは存じぬたのつゝ

後政右大臣の時家の奇命——意の念と

しるあり 皇太后更長後成

達といふ力とくへて存約のさふよくと痛てし福を少し

後政家丹後

心願の爰小慮じ意をたのしと書れををゆこあ、

越——りす 民部口成範

意儀くおめらる育れ爰あつよ遊といふ人か君の福あめ

あひて物中ゆきり女の口うそこ紙こようこ

いこくゆきりといふ枕の下ふゆきはくり

あつこいゆらよあつこくつらゆきり

後長綱玄文家

代ついでれよ小君の寐られよいさぬあいの枕りりよ

返—— うちこく——

親ついでいぬよいの務りよい枕もいこくさぬゆな

越——りす 右近中おあら

もいさぬあいのしを訓りり衣名ゆといふおせんとい

後中綱玄通親

あめゆと念とくつ物あは君よあてはゆきゆ

千載和歌集卷第十五

高市人

題——所由

相換

うづ祢よんりゆき是く羨とふいせよ又のそや尺由

よこ——いふ御

祢とまひの移して羨美ぬりわねうれとそはうせせり

いそひくといりてふぬぬしきふとて祐と人ゆれ

まゆり月とふいふふとたてはく人の名海と祢めゆ

策まらふ

まのいふ世の考とつらふと力とつらふとれをこそ備
めら

凡大物朝光りららこしぬえとつれてかき

ゆいせとせめらつらつれとほりつら

馬月侍

千果振とれ祐の祢とさけ君言または我もつら

ゆらひひつらん久しく馬信さわけまは

うらつら

大戴之位

頼一命計いさふう後申れあしわつこう那

まはまわくゆらつらゆらつらよ物

まはまわくゆらつらゆらつらよ物

——つら

相換

おのゝこゝろのまぢりん葉茂るのやうに色も花も
女はうらたふよりのゆりこころのこゝろの
ほろり〜

大納言あはれ

おのゝこゝろのまぢりん葉茂るのやうに色も花も
河く物やけり女はうらたふよりのゆりこころの
とらとあ〜

春原の縁ひ

おのゝこゝろのまぢりん葉茂るのやうに色も花も
しよのの海よあはれ〜
〜あらしと〜

おのゝこゝろのまぢりん葉茂るのやうに色も花も

赤深東門

おのゝこゝろのまぢりん葉茂るのやうに色も花も
中納言の命よ恋の心と懐り

春原の縁ひ

おのゝこゝろのまぢりん葉茂るのやうに色も花も
海川院の由阿百首命よ恋の心と懐り
よめり

陸原信

おのゝこゝろのまぢりん葉茂るのやうに色も花も
花冠たふ居り家小のり〜

るしすくろく病ゆりてわろくさくさくさく
よひまじさくやほよまじ前山崎守なり
くろりのふゆりてゆてつひつるりくろ

中近右大臣

西とやとせまそ山崎の伏見里小新杭より
くろくくゆれたあやまくれゆりて
まじさくさくさくさく

百首のすまわろ何意ゆりてよめり

侍従山崎河

まじさくさくさくさくさくさくさくさく

上西門院兵衛

うわろくせし契とさくあまつとさく今れくろあま
前参議親隆

あつらけいふ杭のあつらんまじさくまじさく

まじさく

右大臣

しつたくさくせんせとくまじさくまじさく

右近中右良

ふしあまろくさくさくさくさくさく

左大臣

まじさくさくさくさくさくさくさく

大里大后女小侍位

君よりうたぬ玉のよきていつのまに妻も法まねらん

二条院讃岐

君より心圓と信つていせうわとふい海一は

殿旨の位大輔

かたわら氣急と見てまゝさるる冷空とわづふさひるる

俊直法師

君よりぬれぬわづらぬわづらぬわづらぬわづらぬ

園位法師

池よりわづらぬわづらぬわづらぬわづらぬわづらぬ

月前無とつらんとらぬ

歎きとて月やの物とつらんとらぬわづらぬわづらぬ

痒超法師

久方月はよやの無物一極しは是れわづらぬ

恋の方とて信らん 祐威法師

つし君恨らむとわづらぬわづらぬわづらぬわづらぬ

菅原隆親

さし君心なれど歎け那君をわづらぬわづらぬ

源有厚

あし君心なれど歎け那君をわづらぬわづらぬ

惟宗彦之

しるべきはの世と後多きまははるふとわづらふと

源仲頼

いづつてまじわあそいふは恋のあつと離るるは

信海海意とらるんともめり

鴨長明

さあゆめあつる風かろし浪海とちて切無かり

きつく久あめりくろばとこふあくと今

いあわらるんあ〜とまひまはつ

く〜くろ

大西門前兼位中納

年あましと其又あふふのりじとつ〜と因〜とあは

百首奇り〜くろ内意奇り〜と〜はせはふ

くろ

宗任位中納

歎くは小鏡の影もゆらぬ笑〜事れ〜らるる〜

大京大史部補

年あましと衣ふ〜とぬ目式意〜人のから〜

友原季通下

今〜と〜と神とつ果て〜と〜と〜と〜

里太右衛門大夫俊成

奥山山若〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

お母の床より小見のぬ泪のそゝるの折也ぬれしと云ふ

右京清輔朝臣

朝夕小見のぬ泪のそゝるの折也ぬれしと云ふ

上西門院左衛門

何ぞんよお母のそゝるの恨のそゝるの言をよそ

慈母可しとて後り 啟留門院左衛門

おとさのそゝるの恨のそゝるの言をよそ

慈母可しとて後り 右近右大臣

懐くお母のそゝるの恨のそゝるの言をよそ

右近右大臣

お母の床より小見のぬ泪のそゝるの折也ぬれしと云ふ

懐くお母のそゝるの恨のそゝるの言をよそ

右中納言雅頼

お母の床より小見のぬ泪のそゝるの折也ぬれしと云ふ

九月はさきよりお母のそゝるの言をよそ

右中納言通親

お母の床より小見のぬ泪のそゝるの折也ぬれしと云ふ

お母の床より小見のぬ泪のそゝるの折也ぬれしと云ふ

右京清輔朝臣

お母の床より小見のぬ泪のそゝるの折也ぬれしと云ふ

友原定家

あつし果て中とわりの多は世にけり紙幣をくらひ
杯更意とつらふ心とよりの

朝昭法師

杯の果とゆふよりの恨と枯藤を風くらふあそぢ
十首の奇人のうすむせのつらふ可なり

前参議教長

とよは君よ心のあつてんまこと恋はれん女持れ
昔意教人とつらふ心紙

仁和寺僧人通法親王是性

かみ金をあひあつたくれ恨とくやとつらふ
とよとつらふ

源俊朝朝臣

もよとよむし田んぼとよそをゆしてまじりてのわさ
さめらるる田んぼとよそをゆしてまじりてのわさ

ら内侍

毎朝よ教傳夜のうしけと小糖の杯とゆふ
とよとつらふ

恨つとよとつらふあつたよとつらふ

君之那

千載和歌集卷第十六

雜司上

上東門後より六十願よりひねりくちの時
 うちとけり

あまのこゝろには奥山の若葉もやまじ
 上東門は内河川の岸風よほそそ
 笛吹あそびをさかしくりなりふはうとけり

大御堂ニ兼位

笛吹の歌あはれ知らまはゆりうき風吹やまじ
 一条はりの河原皇后宮又兼位よりけり

辰日一つと十二人よりひねりくちの時
 うちとけり
 わらわのこゝろにひねりくちの時
 うちとけり
 ちかみよとさうて中ねる言ひ細信ありては
 くらみよとて

後拾遺

あつちの山井の水のこぼれもつらむ
 うちとけり

皇后宮言信の納言

うら氷ありしとつらねもたあつち目新よひり
 十二月廿八日

恨らりたる男をいふわく門がわさわらん
やしきて約をせしはかりきり

上東の信宗公

あつ里のまれたらふ尊れ家よまのう者としらん
友原玄方朝信のよの井原よりのふあ
てあふのさうあて朝よはかりきり

友原道信朝信

妹と称してふあわこれ道とあて中く物のさり
二月とあ月のあつ里に二条院あくら
あまこあわして物結ると志のり

同侍国信よあゆして枕とあてあひやふ
いふはうして大綱とあてあま
いふはうして下とあてあて約をせし
うこ約をり

国信同侍

まれのあ計らるる枕よいふとあてあひやふ
といひあて約をせしはかりきり

大綱とあてあま

あまてまあつことを枕といひあてあひやふ
一乗院四時會后文よ信が綱とあてあひやふ
約をりは二月とあてあてあひやふ

よのの夜もつらさしくゆかり

里名宮 定子

ふよと心もなほなほしき言わつてふ可うなれば

のほ — 清少納言

言ふ言ふ絲もまほと可なりを詠めはるるふ

いぬく物なれはるるふのじとあり女房の

つらゆも珍なりありて思ひくかこきとつふ

こわまはるるるとありてこころくかよまされと

つらり — 選子内親王

道はちかきく — 一とありてつらさきとありて

選子内親王よゆかり右近はれ兼後よとあり

この櫻のうら車よのりしとて又の日は

り — 兼後中納言

みとたせが義の川はきくありてせよ袖の湯は

下はあめつらひとて袂にあらはるるあり兼後

女房よはるり —

兼原之方朝臣

ちりや振らつてぬまの藤絲ありありと兼後

深は世わきありてくれゆくはた宰相

教道のみとれとらとてはるり —

とつひとつたふつらうらうら

和泉式部

ひらりきふよきあつらふの鳥さるや同好やまは
と海門はあしれいひうらうらとひらりき
ひらりきうらうらうらうらうらうらうら
女房は許よはらうらうら

八条前太政大臣

何れも見よけい月日せしきそはたけい波立をわら
かゝのりつひにわらわらうらうらうらうら
ゆらうら又の目雙林寺のみなはよきよき

何れも見よけい月日せしきそはたけい波立をわら
うらうらうらうらうらうらうら
式子内親王

なごじや新絶るひかふらしてあはれ波立は神を傷じ
右左衛門督よゆらうらうら中後右大臣中納
言よゆらうらうらうらうらうらうらうら
流しと許してこのひはゆらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら

大言前太政大臣

やうらうらうらうらうらうらうらうらうら
中後右大臣

何れをさしおひ獲つてさむのいさう又引かす時とさむん

右大納言長基日乳翁の上卿よ立竹よきり

とふ藤原光徳より信徳の六位よ竹より

よ忠とあれ竹をよとせむ竹よりと竹

く月より多し又の日はあつたうりよふさう

とくせ竹より 大京ちま羽捕

可る見ぬふりしとあ誰をいふ心お程を限さるれぬ

と東門院よ竹よりとことよあうり竹

女房の口うそこれつわくよ御侍よへ

ゆうとんと云て竹をれはつり竹

二条式部

病後とよみたりと此法の書とあうりけさくや人の為じ

二条院の四時と一はあうりちゆさう事と

うけ治りあてみられたのうらよ竹よりあうり

罪後の治りさしたるわけさう行幸をさう長

月のあうりさうふ女房れりよふ竹より

後三位右大臣

人あさぬ人月山山とあうり本く此の三月とあうり

と二条女房 瑞お 道世れらああさあを母

月あうりつり竹とさう竹より

後中納言文徳

秋とく先とせとさかへはらぬ月の影をよみ
月おなとりつらこゝろと

仁和寺後入道信親王

ふふよ思ひこころてらる月のくみりあはれ
月乃守あまこよゆせはらむ時後約たり

信成入道前左政大臣

え渡り國つこめし浦さくちと都よ月かめし
あはれ東宮の月かみりてやとぬ氷れつとあは
越しらす

中務卿奥平親王

秋布て月とさしむ秋の影は何事とらふ人のこゝろ

赤深忠つ

物らぬ人さやこぞ清涼にほえ秋らまぬ信よ月とらふ
さくさ

海つ青と月かきく物ほくやい秋のひまらうらみ

和泉式部

物のと衣らりし我らぬ人よとぞ月かきとせとや
うよと物らるは月のつらくわく物らるよ
うらむら

久我円大信

ゆく斗を世中れとくあよととた丁めらぬいり月か

山家月とつるをよむとつる

望太店文々後成

任従くものくもつるに里小のゆわくゆわくと其の

百首の奇をわくわく何月の奇とそよめる

前参議親隆

し中ゆとつるの月とつるをよむとつるをよむとつる

月奇十首よむとつるをよむ

友原家基

といふよむとつるをよむとつるをよむとつるをよむ

後画法師

後めらるる清滝川よむとつるをよむとつるをよむ

加保成保

天原とつるをよむとつるをよむとつるをよむとつる

野道法師

林よむとつるをよむとつるをよむとつるをよむ

友原清捕頼ト

今らわい文の道よむとつるをよむとつるをよむ

やうとつるをよむとつるをよむとつるをよむ

よらうとつるをよむとつるをよむとつるをよむ

登道法師

閑ふや人のふれり月をばけしふるさゆり
都とらるるをくしをくしりあきゆりける時
月とらんとてしるるゆり

法印頼賢

あきふよといせふりりこいせらるあとも山はの月
月の奇あまきと深ゆりあつさうひる月
のふとよあり 源仲正
しあきと我世あまきと知とひりさう月とゆり
見月無散人とりりふとよあり

源仲徳

さばあし人のやとよや逢ふたの月とゆり
百首奇あまきと時月はあてふあり
待賢門院権川
あき我世あまきとあまきと月よとを那
後一位友原多よやまひゆりあつてり
しあきあつてをわらうとあつてり
あきとゆりあつてり

近衛信御製

あきとらるるあまきとあまきと月
あきとらるるあまきとあまきと月
あきとらるるあまきとあまきと月

睦月のせきくくゆふれらる

二和子は金道法親王は性

本朝りらと時の月のとくはの世や山は祿と事ゆ

月より新とてく見ゆる

三性法親王

風高と事ふとぬと波や月をら秋の祿の風

権中納言長方

あそいはる海といとくふとくふとふとふと月

殿局はあくくく百有奇とくゆり多時

月はあそく後ら 右京定家

いふ中とて是世も慰まはれし一月は洞ゆらる

三くらす 右京家隆

山深と宿の風とあけめて誰か祿をよ月とらる

八条隆六条

待たるといふ心をきくはぬめは山はありあき月

法中玄修

世といふは月と事ふらるや山はよのこふひを森

右京隆親

林といふは月の宿とあきぬ合をなをくく人まら

夜はとらるふとくゆらる

園位法師

霜ふらた庭の木は秋の合て月をうらやと回くま
世法のうきこなたぬゆめよゆめわらわりのとて
人よほりりりりり 平之文三

任ちれ君とてわくぬゆめ月とてわくぬゆめ
政の月とよりの 後惠法師

政の月とよりの水み糸わく月とてわくぬゆめ
水上月とよりのこころの紙

春原のり

さとしの朝とてしとせらぬと法を記水よやりの月

頃茂祐はあや合よりの奇とて後

春原親感

何とてわくぬゆめ月とてわくぬゆめ

山家院あやとよりのこころの紙

大の公系

了はあやの朝のあやとてわくぬゆめ月とよりの紙

山家月と後り 朝蓮法師

山家月と後り 朝蓮法師

月照を糸とよりのこころの紙

紀原宗

偏を小紅とや申すお花の萩の上へ紙をくは月を
月照し水とつらふと

信眼長貞

由はまの山と水とつらふと
山のしれ月とつらふと

友原為忠朝臣

あつたよれお花はよ木枯よ
急な月とつらふと

美延信師

山風よとやのきつと急よ
月影の入りぬらほよ

信平一英園

山影と月影とつらふと
月影の入りぬらほよ
後政前右大臣の家よ
時月の守り中よ

後高信卿

いせみくよと急よ
月のあつと急よ

いせみくよの中よ
急な月影とつらふと

うらこ竹々々

里石居又又後成

いふまはまのうらこ竹々々て代々言の月と竹ん

証河化の中河百首の奇なる竹々々竹々竹々

いふまはまのうらこ竹々々

友系竹々々

竹々まのうらこ竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

竹々

竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

源後頼朝信

竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

源周信師

竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

竹々のわらわら竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々竹々

源後頼朝信

あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ
あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ

道命法師

あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ
あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ

同

あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ
あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ

あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ

浄身系巻 （因巻 六男）

あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ
あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ

中綱公信忠

あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ
あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ

前只綱公信

あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ
あはれなる御心は世にあらはれぬ御心は世にあらはれぬ

屏風は清高の多りふよとよめる

友原長能

ゆきたらのわらねのしらさの山とあつる流の白玉

糸穂前を政大信布川の滝見ゆらり内

ふとゆらり

六条右大臣

此の白雲とあつるねささき布川の滝

滝つちりりすうてと他家よりここはき

ゆらり

能国法師

きあつてゆらりあつる花さかたねふくいのあつる

ゆらり—色つめのふとゆらり

友原清捕物信

仙人の骨と木とをてふはゆき—は床とらとあつる風

布川の流とゆらり—あつる良清

あつる安をよの救うてあつるあつる布川の滝

あつるゆらり—友原長能

流のまのあつるの流とあつるあつるあつるあつる

河川のあつるあつるのあつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる

はつらぬつらつらよゆ舟とてわてしとてつら

くら

指中納言後忠

いふとらふ言結まれし世れはまの塩津よめら昔れ舟

百首の奇れ中ふねとよりり

修理左大臣敦基

玉藻らいつころふれの若祿まき世さあまのめ鏡

友菜とよりり

源後頼朝信

浪とての舟鳴り海をわらふ浪とて風の吹ぬ船

廣田祐の奇合とて人々こりこりあつらり

海上眺るるとらふんよとてつら

大納言文家

多あ結部のこれ字のこりてはなつとよの舟よめれ

指中納言文家

橋たをほりぬまきふん後せは浪いさかの物にけり

右衛門督頼光

くらくとめまの舟とて後せのまわふゆふ誓の物

眺るるとらふんよとてつら

源言信卿

難波の塩津をよと後せのまよふと舟をほり

あつらつられ言信

長履高袴の姿とてしめしむる浪のくちまぬげとて
和舟浦とてしめしむる

祝部若孫成伴

波の音とてしめしむる
うらな

千載和歌集卷第十七

雜歌中

ふしきり類とてしめしむる
さくられとてしめしむる
後日清とてしめしむる
馬羽佐とてしめしむる
心わはむいとてしめしむる
落花の心とてしめしむる

仁和寺後入道法親王之世

しふふ恨も果し梅花の世の恨とてしめしむる
信都頼之とてしめしむる

乃花盛るといふくうとゆかり

信正為範

若とやと花を帯ふ白くもまはれ色いさひりわけわ
りらばりて後東山乃花見ありこゆ
りふ園極まれ花ゆり一語わかると見
てうとゆかり

前中綱玄畧長

いふふつとさりたり山橋花の枝といひくるとん
道世乃花なるれ奇とてよめる

里乃信文夫又俊成

雲風のまはれふふとくは林花の枝ありとていふと

石山よあひくまうて流るるとんそれい
実乃と水れれとよ雨車とてめてこれいふ
やと心わきくありんて後世流るる

東三條院

あまのひのわあ坂の雲水ふ今の限の影そくゆりこ
ふよのやわてきりゆひると志ゆかり時
りこゆかり

前大綱玄公任

今いして入るし花をうかゆり山橋とてうとてあは
まの流あらしこよゆりわてうあ

其又世とは雲の影あやゆり山橋といはよゆり

秋事一竹々々此より

和泉式部

花とぬきれ應あまは海をくふあつくはゆいふまじ
前大綱云ふ任長前と云ふあまのあま
わんら河はりり

法隆寺入道前大政大臣

若風をさらや果つら言風よ言甘てま言ぬら
あまのいふわくゆんら此句落て心程
あまのあまのままてさて奇きと後々
つわくよ後々

善後法師

あてら不程あまはく山小君あまくとさあま
除目ら此つと為つて秋物らと花
永くあまのつら

大和公實

手毎小洞の川よりうみ力あまをさぬあそま
あまあまは橋のかとより

原伴正

あまのいふあまのままは海は中はつら
あまのいふあまのままは海は中はつら

園位法師

教と見て悔の心や猶花しきふらりたるし如ん

花の奇あまきと懐ゆる時

花よき母心れいと世久し懐くそくうとうあ枝よ
仏よ梅の花とよそまのま我後の世の人さあらや

世とそじこて又の年れま花をよと懐り

新蓮法師

ひまそつひいんと梅花をよとよ不そめし心と

世——らす

世ち花をよ花物とよ懐りそ花のああ絶はし

那うつわると世とら又の年れま白川の

花さうわよ女の手あく花の下よ花と

世とてゆるり とうん——ら

わく斗浮世れあふりてま梅の花匂あらん

花如よは成寺よふあ人金堂れまらん

花の教と見てとうとゆるり

里在辰又寺又後成

物あふん首と知し梅花りりれ葉とも花といひんよ

依花の寂いとちん心とよめり

原定宗綱

山梅花をあらしと守りんとゆるとは来れ花の

源位法神うしめ約たり百首の奇れ中に
花の奇として懐り 友原定家

いつくそ風よとせよ恨は若叶の奥に花の奇あり
花の奇として懐り 源孝康

ゆくよみよとせよとせよと世あはれ花より身よりやと
花よとせよと懐り 源孝康

源仲義朝臣

むせ小若よ梅とてうと懐り花の奇として懐り
ち倉院ま言れ花の奇として懐り
わく花の奇として懐り

しんく懐り約たりよ花の奇として懐り
約たり 源仲義朝臣

位山花よまの懐りよ花の奇として懐り
よ花の奇として懐り
花の奇として懐り

右三木曾公の

ま日山花よ花とてくらく花の奇として懐り
花の奇として懐り

前在徳貞公の

花の奇として懐り

還懐の守としてよめる

後志法師

杖をもち辛御めりかゝと更小世とくくくふふとけり

高田法師

月をもちかゝるくくくくくくくくくくくくくくくく

迷懐奇くくくくくくくくくくくくくくくく

海つらくくくくくくくくくくくくくくくく

若原家基 若原家基

古河を庭よきくくくくくくくくくくくくくくくく

後田村の守人会くくくくくくくくくくく

友東感方銅匠

衣をもちくくくくくくくくくくくくくくくく

名もねえ方中ねくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

中原伸尚

杖をもちくくくくくくくくくくくくくくくく

きくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

越不知

春原ふまね物下

昔の心づから思ひて人をもよひてあつたやの影の光と
夏原も忠

川をまわつて待つる梓弓をつゝ記さうひまうわたり

一乗位内侍冬河

いそいでいゆと川をわて者よるるををうせん

秋政右左衛門の河原の守命一乗位の

あつてまゐり

原仲光

今こそいそいでゆふかとうしてまればなはの世の心づから

はらこめよりせふあつる多くと辯一乗河

大徳正徳堂よりよはつり

源俊重

いふこそいせれは秋みくはつらぬ儀の波小舟をこ

あふこれ山里よすこゆらつるは風をきし

いあつるあつり 源俊重物下

懐の心よと山嵐よとつれく問は行てはあつる袖

山田の庵よとつらぬらつるあつると見とく

よあつり 橋盛長

よ山田の庵小橋中の色はよ立標りや言とあつらん

河川伝力の内百首の奇事をあつり

山家乃心と信り 二条右大臣左大臣服後

山家乃心と信りよ立糖人

長月乃つとてあつたふらつとあつてこれ

のいせうくええれえ〜とてぬんよつら

〜とてぬん

秋乃乃つとての虫色迄とてやうやと人の心

女郎とてふらつて月のあつくゆきつら

あつた物のかさくゆきれえとてゆり

〜とてぬん

いせうの信りつとてぬんよ立糖人

越あつと 和泉式部

命あつたはつと海とせとせと知ぬまふ秋のゆき

和泉式部

教つて心よ力といはせ秋と力ふとてあつた

は秋とてあつと世間とてあつたゆきとてぬん

〜とてぬん

衣乃乃と我とてあつたあつた世とてあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

〜とてぬん

中納言定頼

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

く

前大納言公任

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

前大納言公任

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

あつめばるれ鳳・祢是してあれ鳳をうひもやま

浦仁の女

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

返

鴨子内親王

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

大納言の山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

返

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

大納言の山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

返

指大納言の家

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

々々

仁和寺法親王の御

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

山更ふひひの山更ふひひといふとあつらふと林りりあ

大納言の家

あはれを知らずともやうあはれを知らずともやうあはれを

右近中将忠良

とじつらやゆとれぬの知るとは世にいとふとらうと斗に

二条左衛門右大臣別当

仙川おゆらに幾分うきあうるさり物の家もあはれり

百と守れ申すは逢信守とてよめり

後原定家

とてつゝわがこゝろ母ふさうとく情に人ふをぬつて

務政家丹後

うし連とらふも果は世間の中く何よとて公をわらふ

越不気

清原偏俊

わがつと道あを逢ふ位山もあはれ風をうさげ建良

十月よまま眼もあわてゆらう又の年いふ信

友とをわがゆらうとてさうてよめり

中納言長方

福人の花咲きとよふよとて様とらうと推定家忠

越一とらう

後原昭方

浮世あはれは世あはれよとて洞の物とて洞也々あ

まゝいし國よゆらう何月とて海をうさげれと

しとてわがこのわらとてあはれ何とてゆらうと

これより先きうて初の人れ津よきなり

前右と東皆惟方

い際あともうのじとさげの海川ちうましーうあも湯の袖が
せとそじしんとさひあらしんらゆらぬ

宮人法師

のくせ^{せい}まをたれを捨んそんとさあよちれせりりなり
ふひかちんしとあくまぬ國ふり即りなりと
しうとあて系よのやりて後日者れ結
さわかちくうとゆわたり

平康頼

あひるや志願の浦波立ゆわ入のあをそらん地とん

迷懐の可なりとゆらなり

登道法師

あひるや志願の浦波立ゆわ入のあをそらん地とん
修りよゆわありとさなり内らなり

足保法師

あひるや志願の浦波立ゆわ入のあをそらん地とん
せれつ保ちたりとさひてよなり

指傳心永縁

あひるや志願の浦波立ゆわ入のあをそらん地とん

ははらり車あつてくまの位なるうよよゆり
くろよんろくさつりつりなれつりりり

良選法師

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

くまの位なるうよよゆり

在詞花

今神代と云ふ所ありて今此法花經書を以て
理之由として十日計とてゆめてゆくらふ
房是徳母のこころありて入るる一つま
こころとてありて 前大綱云成道 通一
とてぬ命をまふゆきまらるる君り都よりわあふ色
也——

心世は持て命より世を君りてあやかしとすん
岡古水都こころを心とてゆくらふ

仁和法親王の覺

若くは徳母の外の書世を心とてゆくらふ

高野小舎ありてゆくらふ小奥は乃精進法師の
房室よりありてありて教より見しとてありて
てはかりとてありて 権大綱云云

神代は神代のもろとてありてありてありてありて
林の山より昇りて猿川のあふれ又傍る神よ
ゆらまはありて——正法房に傳ひて——
虫つぎとてありて 友原公徳朝信

まはるるありてありてありてありてありてありて
也——ありてありて 法師 慈也

はるるありてありてありてありてありてありてありて

舜蓮法師

林こら小浮世とくく世に於て拙作つ又まけり留りは
殷富門は去彌

ほくことあの中一暇の林是も後とんらあをまる

阿伯法師

由らりて物をまかしつとん林是そあらぬ命こらわ

六条位道旨

之を別をうらい様をましくれとれた門をいし世をとれて

と海くししとうのまん人の物あらまらる又善小

筆れとのくとうて

二条太皇太后文式部

今がてうれなすとれてのよの心なくはお増らす非

送らす一 菅仁法一

大井川をせし境を力を投しくらくと今よいつせては

病まさくと山らりあらはのゆらとうらく

あわくないととのまひてゆらり返しとか

よめり一 大石公系

あら山君のめを朽とく昔れ下よいとうらとう海一

送らす一 法眼慈光

分儀ていひの危れととあらぬめとうへん新がらわ

か茂祐の奇命よ述懐可としてよめる

源通法師

世中其の命よ悔れぬまゝにわかれしや
山寺よこのあわゆるわが身よこそ悔りて
人のついでにせんまゝにわかれしや
はらりて

是後上人

世に其の命よ悔れぬまゝにわかれしや
源清雅九月廿一日の夜にわかれしや
人のついでにせんまゝにわかれしや
はらりて

源通法師

世に其の命よ悔れぬまゝにわかれしや
源清雅九月廿一日の夜にわかれしや
人のついでにせんまゝにわかれしや
はらりて

源通法師

世に其の命よ悔れぬまゝにわかれしや
源清雅九月廿一日の夜にわかれしや
人のついでにせんまゝにわかれしや
はらりて

是後上人

世に其の命よ悔れぬまゝにわかれしや
源清雅九月廿一日の夜にわかれしや
人のついでにせんまゝにわかれしや
はらりて

源通法師

ふいさるる麻の着いた紙山あく家指せしや

起ししらあ

友原宗隆

月乃着れさあし紙さそひさそさる指と着るのせ

大宰大貳主家入道力由りあくは山寺

懐旧とつらゆ紙より紙

友原五家朝信

初瀬山入相の種をばくふ小首紙とくあそふのた

まは久我よ由りまあらはわくよはれ種と

との巻下乃あさあの花あなつと見てしし

花種とゆなつんさうとふひやくより紙

夕

控中綱玄通親

友種り昔の下あを獨花ゆしゆや種めらるん

わらあらうゆくは前中綱玄種朝まこ

小男よゆなつ時うりて採履Pさせゆな

とゆりさたゆなれよりそさう口さゆゆり

けり

入道前中綱玄雅龜

嬉し紙返くさつじつさ昔は杖のせらくもあつた

還採あくゆなつ人のまといつりゆ

けり

友原孝経朝信

嬉し紙よふの袖さつじつさ立ゆあわらゆれん衣

今と此津の所又前より極約は定家やゆら
わらふ海にいつくしむ事よこしく後とこれ
うましく約するそ此年と書きよらみり年
の海生人のはわらうは後よゆかしきしれ
はあつさうし た抄舟定長は件よP約たり
よそつくと約たり 入道皇太后文左大臣保成
若くは書物達一筆書て書くとくや福なりつこと
いりしと奏しP約たりしめしこく表わら
せ物ましくし今らや還罪位とくすす
いしうしはまいたまふとくらうしむしぬ

作とつくと世と作がされ多違しうそははる

南原定長朝臣

若くは書物と合してうしゆめは書物多やらるは
これららわらわらむししれ聖代しむ
らしとくしむしむしむのしP約たり

千載和歌集卷第十八

雜奇下 雜禱

短奇

海川は津河百首奇なる河迷懐の
奇としてよそをわたり

源俊賴朝臣

まの川 瀬くれ若と わさるあ ねのふらり
わたりまこと けふまはく せうせつ 庭かへり
まのしる けふはまれ まはらこ ちかきくひ
わたりまは いそいえと まさこ成 こい運船の

うのまて ひくひりた かきんを 浪の立舟
わあきとと ぞうたをま けりて いまもまら
まのうふ まよの鳴し けうらと ねうら神を
くら果ぬ 何うふは ありまを ぶらん人よ
わあともろ あれは若 うちかて いちたされ
まのふれ いさ海あそ したつん ことこのこね
く風若 まよしたはと ちあまう ういり定あ
ゆあつと われこれ揚よ 文木ひこ まらたう原舟
まあつし 若とよふに くらじと わりかたふ
まあてぬ まのうふまれ くらめり まのうらふ

侍賢門後歸川

とれきうぬ なる理まよ くららそ びーねまの
 しのーうふ 何のあやめを わたのこ くらぬ月雲
 新んくも 可ぬふぬく 神の濁ふ ちぬされ傍の
 あーらも わんまじひで まふんを 浪よあふふ
 ほりぬの らたされはし 世をれを 君ふらうを
 ひきうらり ちきこられを ことれ業 忘れかみく
 何の白の 松のふ年れ くらくと 物くらうふ
 さうゆとさ 考盤の陰を ぬのじを きくされ陰の
 ききとて ゆらの枯の をひくこふ 色あうらて

ままあー わ紫れ下紫 のらやと ち考れ書よ
 くらぬまじこ りいあじよ ぬくひつ ちぬまじよ
 けらうく くらぬ紫ふれ 水くらぬよ わんまじひの
 くらぬあく くらぬれ名と ちぬぬれ くらぬあーや
 くらぬまじよ

後編一

志まのあさひるんよ ぬくまあうらる後何んそく
 のわあうらうらるはみなりとれしーうあぬあ
 ようらうらる 源仲正

東海の人まじれあうらうらる君ふあぬれは海ふらる
しんまじよ

海

源俊賴朝臣

おし流しゆれつと揚あきんは隔ちる處も情しゆくは

百首并一年々河津の心とよめり

元氣次第補

東海の時鶴が流れ流風よわいさしひか味のかはるぬ氣よ

折句并

二条後入の時ふさきと云又まよと句り

上よ名とくあひのん気

源朝臣朝臣

約きていふこよふはさ田川白波とよるなのおこり

かともあここれぬのーとくろ小名とく後のか

とよめり

仁上信師

何れも物を中北秋風のあはし兼の縁は保えり

物名

うさこれと縁り 和泉政部

よれ福小あきぬ人や母あぬはるこもれと記あり

よしむし 中綱玄定頼

流流くもあつとんを物とがな流るはけと風音とよん

よしむし

大貳之位

琳紫のあまをさし流流記のりるーとく後あり

ふあはくこと

二葉大皇太后文服後

おのゝよしのいかにいかに水はよむとくついでに
うんや

保後撰朝臣

我約とまうことあつやまもつりことこれ里ふをこころ
ゆへふれやこそ

見く山ふふれやこそ住民の年とつじは柄こそ
あつことつた

ふこそふ心とひく頼めた我こそ望みくつたはるこそ
こあつた

形部曰頼輔母

秋の小娘とこそりんつたわづかふれをうらふひは

百首奇なまあふる所のあつこと題の奇

こあつこと

侍闕門後堀門

秋こそあつことたあまの雪降してつるるこそたふの
ふ門の足

信都とこそ

いかあ山とつた秋の年あつことつたの結縁ふいぬわ
かたつたつた

小室道法師

若あつたつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
能譜奇

花のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

道令法師

わやくと花のわらわらよあはれふれむいさじらんやと

卯花とまゆり 源後頼朝下

卯花よいとしくいけ鳴り浪もさ枯の岩とらじ

又月又日昌蒲とまゆり

高周法師

くらくら枝は緑もせあやめ葉うたの成り小はとにや

まゆり 楊俊強朝臣

このまゆり花のよよふくわゆいあこいあはれとせ

まゆり 海月とこいこいわはれ鳴りあてまゆり

白侍候

あふらとこいこいあはれいこいわはれくらふくははれ

まゆり 浦仁親王

秋まの輝のなをくらと時さぬあふれあはれん

二秋のあのおとまゆりとこいわはれはれ

あふれはれはれ 友原為頼朝臣

朝露を月さけて見れはれはれ秋の上まゆり物やれ

紅葉ははれはれ百有奇なまゆり時秋の奇り

まゆり 花をたはれ家小を

まゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

卯花と見えて道よまゆりまゆりまゆりまゆり

よみり

信都花玄

高野原のつらねはくし女前社と其社の後やとら

九月十三日 一よみり

か茂由さひ

高野原のつらねはくし女前社と其社の後やとら

信都園地とつらねのつらね

源信清師

板屋とつらねのつらね

河川信のつらね

板屋のつらね

信都のつらね

福無

源信賴朝臣

高野原のつらね

百首寺のつらね

待賢門院信行

高野原のつらね

六波羅寺のつらね

のつらね

よみり

良嘉信師

高野原のつらね

山寺ふりてゆきし時心あり友と女衆
あもしくつらゆゆきは懐てつらゆ

宮人法師

花よりよこそぬけられぬ木槵ゆきつらよよはなれ
契縁結よこそわくとゆきつらよ小政平つ縁舟
まふこそそてあふとてゆきつらよあふとてあふ
いふらとてとらとらゆきつらよこりゆきとら
よとちあふとちあふとちあふとちあふとちあふ
まふやとちあふとちあふとちあふとちあふ
つらとちあふとちあふとちあふとちあふ
心之法師

苗竹ゆきと何おふゆきん憐よあ甘あそよけり
あふまゆきよゆきあふらふらあそよめり

道因法師

はなれ渡ふとあそゆきふらふ小住つとさあゆきと
女とととゆきゆきとゆきふととととととと
まあゆきゆきとゆきゆきとゆきゆきとゆき

安性法師 俗名時元

はなれとととととととととととととととととと
あふとととととととととととととととととと
十首とととととととととととととととととと

源後撰御信

唯ふとくろ又まの海とけりて是の御信も実徳と助也

山寺ふまうとくわろ時貝吹くろとて

ふめり

赤深米門

ふま又年れ貝とて吹つろまき米れゆとておめりん

起しらす

空也上人

極楽のろろに福と波とつめていろとあるわろ

拾遺仙法師詠在

十載和歌集卷第十九

釋教寺

維摩經十喻此方の水れ泡のふとて

念とふんじのろ 前大綱云云任

く小消るく不結ふ水れ泡の浮世よめくろわ社絶れ

うろくろまろくろとてちろ念と

定けれ力の浮まよとてつとておれを成果のん

之方如來と記とろんを讀せ流めろ

花山後撰御信

世間のろろのあともろろのまきれれとけろろろ

として集あゆむる時うふんやゆらん物
くこと竹をさくゆらん

友原教家朝信

羨望しそれ曉と待かみの闇とてせ清り灯
吹てまうてゆくと皮山あくるん力
海うあよゆらそぬら方ゆあくとけ可い余
てゆらんともぞ

三十之下れ記音むと事んとして下
まのあゆらん時うのる後とてゆのあ
とらんくうことらんあらん

前大僧正道忠

世と照と佛れうらうとあふれいまこと灯とてらんぬとあ
あふとの記音とんをうとく
月うまに洞をる家限とれ家よらんあと思ひ
悦婆ふのゆらふらん

佛部道雅

ひとせを流氷と露汁家力ゆるとてさふいせし
位信たふれ受持法名者福不可量何
况擁護具是受持とて云やふと備して
物持者の結縁多かりくやゆらんきん候

ゆききり

前大僧正收帳

修くそ若とありのうふわらぬ流法の教を修ん
阿保隆乃十二光仏の名とよき修りなり
中々小智恵光仏の心とよめり

源俊賴朝臣

信念の心の中とよきとあつるやこころれ光なりん
百首有り一多う時常門ふ法折云深如海の
心とよめ修りたまふなり

崇徳院法印製

折云とよき鳥の海よたふて修り修りな教よ入るし

同百首の内花嚴經の心と修り

前衆議教長

ころぬをみよれ仏とよひたり我力一ふきとよき
即ち成佛なりと修り

巡月の心木ふとみぬまのやとびふふ光とよき
法花經位解ふの心修り

前大僧正光忠

改てを念ふぬ法の心と修り
名はらなる入道法親王と修り
てゆかりり送り修り

崇徳天皇御製

修善の宮の光を成すはしたとせれ松の日や照とらん

水邊より

仁和後入道法親王乞性

照と成とせれ松の朝日あり成音りあり罷や消らん

百首弁の中ふ法又の弁れ中に善賢

朝の唯ふ朝王不相捨離とらん心と

式子門親王

あつと桂別りく又あ色とらん八月の朝と枯さけ

百首親よりせ物らん河清又の弁ふ善賢

ぬ来とらん心物らんよ平等性智れ心と

よと物らん

攝政前右大臣

今と心らん善賢とらん心とらん心とらん心とらん

維摩經十喻此方如水中月とらん心と

よらん

文月口永範

とらん心らん心らん心らん心らん心らん心らん心らん

心之の山よ善賢心後不和心事おなり

て心後心より心らん心らん心らん心らん心らん心らん

とらん心事とらん心らん心らん心らん心らん心らん心らん

と心後てらん心らん心らん心らん心らん心らん心らん心らん

らん心後とらん心らん心らん心らん心らん心らん心らん心らん

物——善因法師の行よつり

信一慈愛

いゝ教育の法や徳をんとあましくをさるる白鳥

五——

善因法師

君の名を標記まん海を不首れわらうの道はわら

信花の神子京内秘言待りのころと

よこつり

た道中ね良神

物のことろに海とわらうとや徳とことぬんからん

物政前右左衛門家——百首歌よつり

物多の河信文の介ね中よ放る種をん

心よめり

善原隆信物

是行のじり——いけいけいけの世の仏かたはけ

同——百首の河色即こを空即こ色を

心よめり

物政家丹後

空の色をら物とされやまれをぬんからぬん

信花の神子京内秘言待りのころと

よめり

前中納言物

永長をたれ物とたれまてけやめわらんねれ

よめり

善因法師

鶴は山月と入ると月を人にくらばるは遠くをみるなり
暖酒と人々をたむけぬ物も楽に當るは師匠の人
片断ありとくありとく物なるよりあり

秋後伯影伴

心はなきばは影をうらめさし海や甘んと思わぬ力
大泉經の言常事のみ心とよあり

秋後伯影伴

朽木の神よいつくしき宿りくもは信を
誰に神十喻は力の暖みとくことあり心と
よあり
友東濱陸お下

見らば春も夏も知まねし現と今の現とあり

水邊法師

驚く我心をうらめさし世とは夏と見え
ら神よ糸とくことあり

水邊法師

暖酒と神と山ふり行や言は下あきありあきあり
煩悩即菩提の心とよあり

式子内親王家の中お

ふいふ心は成りしとあり火とくことあり
観音のちとくことあり

前大綱玄河魚

新の記しつひのまよわく新花指し枝も花をうらなひ

信花經序品のかとよめり

藤原伊能

ま毎小能也と信のあいらうの娘とて花をさくらわ

源記品れん後よめり

右京大夫季能

見兼はて敷とあこあとし見し花柳も月院之も花れ

信師品漸見隠去に交き知也水のん

くくゆり 皇太后文太夫後成

じこのわわの孫の井とま地と娘くも水れらうの娘

新婆品とよめり 新信師

若水としつひのうのちのまよわくとまのなまの娘

幼持品と後り 信持泰之

新果くあやうくみしとまの板目の橋も今信とこ

右京教仲

恨つみらるるやあふ月つはれゆと懸山と照は月け

神カ品如月光の能存福幽冥れん

よめり 蓮上信師

日堂月の新を照しうらうの園とれよとて

幼教不ぬくら紙よあり

曾た信宗ち又俊成

又ふ又花を信くはれ山信の是れ書くはれ

満之七日己未六才白象れんよあり

中原五女

侍てといふ嫌くふらんらん歸れ山のそ若月

吾胡安法とらん紙

中原清室

物まふた信信の庭小海書いさよわおの教とて

山陽寺の涅槃寺の書くふ遮所入威

せーとゆひよこ物あり

惠系法師

至月入雲くれぬいあへの教とてあのおよまふ

涅槃寺の如於讀中見論色縁のん

よあり

俊秀法師

信くを心れ庭とくくあくやそを移り色とて

火感久不燃とらん紙よあり

舜舒法師

糖ふふ志はくもいもあふ山立別あし教ん

あまこ物のかよあり

平康頼

説

高麗と海島を巡りて用ひて書とてはたこり

天王寺の宗り幸の何古寺也者とい

ゆるん心とよめり 友原定長朝臣

白紙とて紙の青ふかりて孫とてめて久し時と

ちまふふといりて造り舍利と礼

てよめり 天名親之明云

高麗ぬめりて紙の糖を借ぬる所とてその紙を

借し後式とてさうてあつたてられた教化

の所よりこの竹あきふ

律師永親

みまんと後とてさうてあつたてられた教化

みまんと後とてさうてあつたてられた教化

みまんと後とてさうてあつたてられた教化

みまんと後とてさうてあつたてられた教化

みまんと後とてさうてあつたてられた教化

みまんと後とてさうてあつたてられた教化

十載和歌集卷第二十

神祇奇

後一葉院の四時くりて去月社へ行
幸もさくらふ一葉院の四時れ例と助り
りあつせ給ふくしませ給ふら

上東門院

と筆出さしてあふ々の儀の神あることゆき給と御
長元八年岡白たふ居奇命一節なる
ぬらたふれこ人ふらふひは信者よ猶と
奇よりこ給なるよたのなあそりこ給なる

大納言経捕

信者信を念とせむたじふ行よ立揚あきら
白河信望能母へ美くせ給ふらる津信
あくあむやれまよれれ節りてんく
奇よりこ給なるようこころあなる

は二葉門大居

ふよとくそめらる神もは信や少法と多る能り
百首奇りらる河神祇奇とそよゆせ
給ふらる

一葉院に津の製

道はる信よえとやよきて神もはとあのらこあ

辰原清輔宛

夫の如きものや柳葉の如きものよ

申納公家成候よりよまうしてあり

約なり河より 大さうん澄子

新代あつたれ浦小宮指で渡ぬん

大さうん辨して申仕つと約なり河

結の命合とてん、より小宮

あつてより約なり 右左信

あつたれ浦小宮指で渡ぬん

そのら新感ありや、よ、後想ありて大

納公よりと選仰と約なり

同一年命よ 曾左右又左後成

後あつたれ浦小宮指で渡ぬん

同一年命よ 新野月と約なり

約なり 右左信

あつたれ浦小宮指で渡ぬん

後あつたれ浦

あつたれ浦小宮指で渡ぬん

廣田祐の命とてん、より

河新頭書と約なり

後水田玄文回

よもつと書出さしゆりまてくわいつと林の徳あらん
有馬の湯小書ひて九年五くちの信り
ゆりらよ湯の神とつここのの林とら
じりゆりうてうたけくゆりら

福家後資廣

めつとく書とつ揚の神はまら一馬の湯あ
徳神よまうてゆりら時教心門のまはて
りこゆり
指中細玄経原
ゆりら神のりらとらるんそんをゆりら入あ

三揚の祐あく履とよめり

傳部範玄

ゆりえ履としまとつ山神のちり一かくれゆり
徳くよらゆりゆりらゆりらゆりら
祐よまうてゆりらとつここの履り
ゆりらゆりら時ま神神のや一ら小ゆり
ゆりらゆりらとつゆりら

年々るま

今とよるとゆりらとつあ神ゆりらああと神と
ゆりらゆりらゆりらゆりらゆりら

多のを備はの少何なり

竹是のくやああくのりらと同一社の神田

よつらんともくらの法徳くうこそはけ

ゆりりりり 加茂政年

ふあたと頼そく頼ゆいすことより行はれ社とこつ

そゆらららじ神田より成りりり

百首守の中ふ社後の守よりと給ふ

りり 式子門親王

ふあたと頼そく頼ゆいすことより行はれ社とこつ

加茂社の守合とてんことよりて徳ゆあ

多の何延徳の守よりりり

加茂を保

君と頼そく頼ゆいすことより行はれ社とこつ

同一支社の神田守合の何月の守

としてりりり 皇太后言たま後女

きつ孫田よりりりり岩船ふあとくく社のよれ月

延徳守の中よりりりり

信市一慈園

頼そく頼ゆいすことより行はれ社とこつ

目名のたまの守比とらひてりりり

法橋性憲

あまのくつしむる杯よ信月の光とやと風をたぐは
日者の祐よ少幸のちりつる時ぬれ路のちりつる
阿ふあまのくつしむる杯よとてのちりつる

中京師尚

いささかこの根のさよとて晴てたふ日名ぬるよとて
この神の山は後うりまてたつせれ玉二見
の浦れ山寺ふのちりつるよとて浦のちりつる
とて神ら山とてとて目ぬれぬとてとて
つりひとくよとてのちりつる

俊任法師

深く今神の奥とて思て又うりまてた神の根
酒兼四年遷転の時とてを神言よとて
とてわあくとて君れつ折会とてとて
のちりつる

大甲信物定知

月とて神とてとてなわとてとてのちりつる
とてわらせ中とて神のちりつる

石清水神小舟合とてとてとて
阿は項月とてとてとてとて

能達法師

つ水清と流せし世孫とやらる月とく海を知ら
長え九年に生れ佳位の山所大尊舎主基
方の神ありて丹波國神あり山所
あり

石原茂忠朝臣

孝賢より神あり山所神とてとてを新羅可代あり
治暦四年に生れ系位の山所大尊舎主
其より神あり山所神とてとてあり

石原経衛

うらたけくさばなを新羅いりや山所神とてとて
寛治元年に生れ山所大尊舎主

方神ありて山所神郷とあり

山所綱玄匡房

りやの神ありて山所神とてとて
久我二年後の山所大尊舎主
其の年とて山所神郷とあり

山所永範

神ありて山所神とてとて
嘉應元年に生れ山所大尊舎主
の神ありて山所神郷とあり

山所大尊舎主の神ありて山所神郷とあり

方水之邊大嘗會主基方ぬこより力なく
よわたり河津糸舟丹後正社をひひと
らあり
持中綱玄三書先

見しまのふくふとわを社をひひの山お社とぬこより
之舊元年今上津河大嘗會主徳紀より
舟なるわたり社ありぬの舟ありぬぬ
備社卿とよあり在東寺の御朝臣
きんをぬぬよ今をぬぬと君とやらよと社をぬぬ
同し大嘗會ぬぬ主基方舟よりこをけり
社糸の舟丹後ぬぬ舟山とよあり

在東寺の御朝臣

らと山社の代はるる社とぬぬとぬぬとぬぬとぬぬと

巻第十回

在東寺の御朝臣

在東寺の御朝臣

ぬぬとぬぬとぬぬとぬぬとぬぬとぬぬとぬぬと

右の舟在東寺

秀之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

之

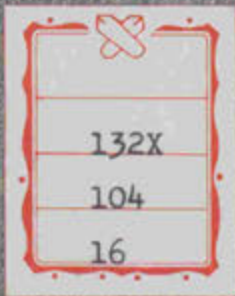
之

之

之

之

之



132X
104
16